

場に応じて主体的にことばで関わり合う生徒の育成 —実生活に根ざした敬語の授業—

須郷 和歌子 東 芳史 弘前大学教育学部附属中学校

要 旨

本稿は、中学3年生における「敬語」を取り扱った授業の実践を報告し、考察したものである。敬語の背後にある「場面意識」と「相手意識」を教材化し、敬語発生の原理・原則に気づかせ、必要性を実感させることを指導のねらいとした。シミュレーションによって実生活を振り返りながら敬語発生の原理・原則を探らせることにより、知識の習得だけではなく、その運用についても同時に指導する。実践の結果、敬語のみならず、日常の言語生活に対する生徒の意識が高まることが示唆された。また、研究を通して「敬語」に関する中学生の実態を把握することができた。

〔キーワード〕 敬語 相手意識 場面意識 言語生活

1 はじめに

「言葉の乱れ」が指摘される中で、「敬語を適切に使うことができない」という報告がしばしばなされている。

本校の生徒も例外ではない。小学校で基本的な敬語表現を学習しており、どんな状況で用いたらよいのかも大方認識できている。が、いざというときになると、尊敬語と謙譲語を誤って用いたり、3種類の敬語の組み合わせが不適切だったりして、とっさのやりとりにつまずくのである。

これは、日常生活の中で使わなくてはいけない状況に置かれることが極端に少ないことに起因しているのではないかと考える。例えば、授業中であっても「先生、ここ教えて」と丁寧語すら使わずに話しかけてくる生徒もいる。注意を促し言い直させてはいるものの、それが学校生活の中に広く応用されてはいない。具体的には、年長者や教師に対して「いらっしゃいます」「まいります」など言葉を使い分けることはほとんどなく、丁寧語の「です」「ます」さえ使うことができれば、現段階で困ることはほとんどない。小学校で学習しても、実生活では使わない。これが、敬語を適切に使う力が定着しない原因の一つだと考える。

また、中学生が敬語を使わないもう一つの原因として、敬意を表する相手や対象をもたないということも挙げられるであろう。ところが、教科書教材では「より適切に敬語を使いこなすために、どんなきまりで敬語を使っているか考えてみよう」と掲げてはいても、その説明は「敬意を表すため」と述べるにとどまっており、生徒の実態に必ずしも即しているとは言い難い。日常生活において「敬意から発する敬語」を耳にする機会は減ってきている。むしろ、「失礼のないように」という気持ちから使われる敬語が増えているのではないか。

敬意を表するに値する相手が身近にいない、意識して改まった言葉を使う場面に遭遇することが少ないなど、敬語を使うことの必然性を中学生に感じさせるには難しい時代である。しかし、今後の生活を考えたとき、「相手」や「場面」に応じて適切に尊敬表現や謙譲表現を用いながらコミュニケーションを図る力は必要である。

そのためには、どんなときに敬語は必要になるのか生徒に気づかせることが先決である

と考えた。「敬意」以外にも敬語を発生させる要素はたくさんある。

従来の敬語指導では、尊敬、謙譲、丁寧の3種類の敬語を正しく言い分けることを主なねらいとしてきた。それに対して、今回は、敬語という言語活動を支える背景にある「相手意識」と「場面意識」をとらえさせることに重点を置いた。生徒の実態に即して、生活の中で形式的に何気なく使っている敬語の中から敬語を見つけ、それがどんな原理、原則によって発生しているのかを明らかにしていく方が、より現実的、実用的であり、敬語の必要性を実感させることができるのではないかと考える。

2 研究の目的

この実践では、「敬語」が適切に使えるようになるなど、現象や数値で即座に評価できるような「ことばの力」にはあまり固執しない。その代わりに、生徒が「相手意識」「場面意識」という新しい視点を獲得することで、ことばを別の角度から認識し直し、言語感覚を豊かにすることをねらう。

どのような仕組みで敬語は発生するのか。なぜ敬語は必要なのか。「相手意識」と「場面意識」を教材化することによって、表面的な知識の習得に終始しない敬語の指導を目指したい。

3 研究の方法

今回指導の重点としたのは、前述したとおり、敬語の種類や正しい敬語表現の習得ではなく、その前段階である、敬語発生の原理・原則に気づかせることや、敬語の必要性を実感させることである。

そこで、日常生活の中で、具体的にどのようなときに言葉や表現が変化しているのか、かろうじて使われている丁寧語「です・ます」は、どのような状況に置かれたときに、自然と口にしてしているのかを振り返らせる。その際には、いくつかのシチュエーションを設定し、実際にどのように伝えるかシミュレーションさせてみることによって、言葉遣いに違いがあることに気づかせる。

次に、なぜ言葉遣いを変化させたのか理由を洗い出すことによって、どのような「相手」「場面」に遭遇した場合に変化が生じるのか、敬語発生の要素「上下」「内外」「親疎」「公私」「立場」「話題」などを見つけさせる。敬語発生の要素は研究者によって定義が異なるが、今回は言語教育の立場から書かれた論文と、言語学の立場から書かれた論文とに、共通していたものを取りあげた。

さらに、「です・ます」は敬語に含まれることを確認し、普段何気なく使っている言葉が敬語表現の一つであることに気づかせる。小学校で学習してきた尊敬語と謙譲語は普段の生活ではあまり使っていないことを意識させ、丁寧語だけでも特に支障はないという仮定をする。その上で、尊敬語と謙譲語を使えた方がよりスマートに会話できるシチュエーションを用意してシミュレーションさせ、敬語を用いた理由を説明させる。

これらの学習を通して、習慣として形式的に使ってきた敬語が、ある原理・原則に基づいて発生していることに気づくことは、生徒にとって新たな発見であると同時に、「相手」や「場面」に応じて言葉を選ぶ際の判断基準を獲得することにつながると思う。

中学校で指導すべき言語事項の中でも、日常生活に密着した「敬語」を扱うことによって、「相手」や「場面」を感じとりの確に判断しながら、言葉を適切に使い分ける力や態度を養いたい。

○指導計画（4時間扱い）

次	時	ねらい	学習活動
一		<ul style="list-style-type: none"> ●「相手意識」と「場面意識」によって言葉遣いに変化していることに気づく。 ●どのような相手，場面のときに言葉遣いに変化するのか，敬語発生の要素を見い出す。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【学習テーマ】 言葉遣いはなぜ変わる －「相手意識」と「場面意識」</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○実生活に即したそれぞれのシチュエーションにおいて，どのような伝え方をしているかシミュレーションし，発表し合う。 ○言葉遣いに変化するのはなぜか，理由を発表し合う。
	1	<ul style="list-style-type: none"> ●尊敬語と謙譲語を必要性を実感する。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【学習テーマ】 敬語は本当に必要か －「尊敬表現」と「謙譲表現」</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○「尊敬語と謙譲語は使わなくても生活できる」という仮定をして，シミュレーションに取り組む。 ○尊敬語や謙譲語を用いた理由を発表し合う。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ●敬語が発生する要素をできるだけ多く見い出す。 ●複数の要素が重なり合って，敬語が発生していることに気づく。 ●どのような「相手」や「場面」に遭遇したときに敬語を用いたらよいのか，今後の言語生活に見通しを持つ。 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【学習テーマ】 「わたしのことばが変わるとき」 「わたしがことばを変えるとき」 －身近な敬語表現</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○敬語が必要になるシチュエーションを考えて発表し合う。 ○なぜ敬語を用いるのか説明する。 ○敬語発生の要素を「相手」と「場面」で分類する。
	3	<ul style="list-style-type: none"> ●尊敬語・謙譲語・丁寧語，それぞれの働きと識別の仕方を理解する。 ●代表的な尊敬動詞と謙譲動詞を知る。 ●基本の動詞を尊敬表現と謙譲 	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>【学習テーマ】 オ・ト・ナの敬語に t r y ! －適切な敬語表現と使い方</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ○日常生活を題材にして，シミュレーシ

二	・ 4	表現に言い換える。	ョンする。 ○尊敬動詞と謙讓動詞が、どのような規 準で分類されているか発表し合う。 ○尊敬語と謙讓語の表現パターンを見い 出す。 (例) 尊敬語「お～になる(なさる)」 助動詞「れる・られる」 謙讓語「お～する(いたす)」
---	--------	-----------	--

4 授業の実際

本稿の提案性に直接関わる、「相手意識」と「場面意識」を教材化した1・2時間目について報告する。

(1) 言葉遣いはなぜ変わる — 「相手意識」と「場面意識」

実生活をシミュレーションで振り返り、「相手意識」と「場面意識」によって言葉遣いの変化することに気づかせるのがねらいである。

私たちが表現様式の一つとして敬語を選択する際、「相手意識」と「場面意識」は大きな影響を与えている。例えば、交通安全委員が、休み時間に友達に直接自転車の置き方について注意するときには敬語を使わないのに対して、全校集会で全校生徒に注意事項として連絡するときには「です・ます」調で話すのは、伝えようとする相手が親しい相手かそうでないか、相手が一人なのか複数なのか、私的な場なのか公的な場なのかという、「相手意識」と「場面意識」が作用するからであろう。

あくまでも生徒の実生活に即して学習を進めるため、題材は学校生活の中から選んだ。「予定していた○弁(本校独自の自治会活動で、昼食時間に弁当を食べながら打ち合わせなどをする)を中止するときの一言」というシチュエーションを想定し、用件をどのように伝えるかをシミュレーションさせた。

生徒がどのようにして「相手意識」と「場面意識」を獲得していったか、授業の一部を再現する。

○生徒の反応

生徒：「誰に伝えるのですか。」

指導者：「誰に伝えるか決めた方がいいですか？」

生徒：「誰に言うかで、言い方は変わります。」

指導者：「なるほど。みなさんは相手によって言葉を選んで使っているということですね。つまり、言葉を決めるときに、相手が誰なのかを知る必要があるのですね。」

「では、まず友達に伝えるときにはどう言いますか。」

生徒：「今日の○弁なくなったよ。」

「今日の○弁中止。」

指導者：「顧問の先生に伝えるときはどうですか。」

生徒：「今日予定していた○弁は中止になりました。」

「今日の○弁は中止になったので、よろしくお願ひします。」

指導者：「なぜ、『友達』と『先生』とでは同じ内容を伝えるのに、こんなに言い方が違うのですか。」

生徒：「友達はタメだけど、先生は目上の人だから。」
 指導者：「『相手との上下関係』によって言葉を変えたわけですね。」
 「次に、友達に直接会って伝えるときと、全校放送で伝えるときとではどうですか。」
 生徒：「廊下で会うときは、さっきの言い方でいいが、全校放送で伝えるときは、『今日予定していた○弁は都合により中止になりました』と言う。」
 指導者：「同じ相手なのに、なぜ言い方を変えるのですか。」
 生徒：「廊下で会って話すときは相手が1人だけど、全校放送の場合は不特定多数の人が聞くから。」
 指導者：「『相手が特定できるか』どうかによっても言葉遣いを変えるのですね。」
 「他の理由を考えた人はいますか。」
 生徒：「全校放送は改まった場なので、丁寧な言葉遣いをする。」
 指導者：「言い方を変えれば、『公的な場か私的な場か』で言葉が変わるということですね。」

簡単な用件であるにも関わらず、初めのうち生徒は困惑した表情でなかなか答えようとしない。理由を訪ねると、「誰に伝えるのかわからないから」と言う。ここで、生徒は、言葉を決めるには相手が誰か知る必要があることに気づく。さらに、どんな相手だと言葉が変わるのか、それはなぜかを問答する中で、意識がより具体化していく。

次に、「友達」という「相手」は固定して、「場面」を変化させる。「直接会って」伝えるときと「全校放送」で伝えるときとをシミュレーションさせると、明らかに全校放送の方が言葉遣いは丁寧になる。「改まった場かそうでないか」がその理由の一つだが、相手の設定は変えていないのに、場面を「私」から「公」に移したことによって、「その相手が、1対1の状態か、集団の中の1人か」相手意識も変化している。

このようなやりとりを通して、言葉遣いを変化させる要因として、「上下」「特定不特定」という『相手意識』、「公私」という『場面意識』が働いていることを認識するとともに、本時の学習が「敬語」に関わる内容であることに気づいていく。

(2) 敬語は本当に必要かー「尊敬表現」と「謙譲表現」

次は、尊敬語・謙譲語・丁寧語という3種類の敬語が本当に必要かどうか検証する段階である。

先に挙げた「○弁中止を全校放送で連絡する」例でも、尊敬語、謙譲語にあたるものは使われていない。「今日の○弁は都合により中止いたします。」と謙譲語「いたす」が使えないわけではないのだが、生徒は、使わなくても不都合はないし、実際には使っていないから、特に必要ではないと答えた。

せっかく学習しても、実際に使う可能性が低いというのは、学ぶ必然性が実感しにくいであろう。逆に、日常生活で頻繁に使う、または使いそうだと感じたら、「敬語」に対する興味も高まるのではないかと考えた。

そこで、丁寧語「です・ます」以外の敬語、具体的には尊敬語と謙譲語は使わなくても生活できると仮定して、次の二つのシミュレーションに取り組ませた。

○ワークシートと生徒の反応

A 街で偶然出会った校長先生に、同行者は誰か尋ねられ、家族を紹介する。それに対して、校長先生が家族に挨拶をする。

⑥「ありがとね。」→「ありがとうございました。またお越しくくださいませ。」

これらのシチュエーションは、尊敬語と謙譲語を使わないと不自然になることと、現実
に起こりうる可能性の高いこととに留意して設定した。

Aでは、生徒にとって身近な存在で、敬語を使うのに不自然でない人物であるという観
点から学校長を選んだ。初めは学級担任の設定にしたのだが、普段の学校生活でごく親し
い間柄であり、敬語を使わずに会話している実態から推して、現実味のない学習になっ
てしまう恐れがある。その点、学校長は生徒にとって適度な距離感があり、また学校長自身
も生徒に話すときに普段から丁寧な言葉遣いをする。

Bでは、親しい相手であっても尊敬語・謙譲語を使わざるを得ず、かつ生徒が頻繁に遭
遇している場面を選んだ。

また、事前にA、Bとも実際の様子を録音しておき、学習後に生徒にも聞かせた。再現
可能にすることで、より現実味を持たせるためである。「こうでないかと予想したことが、
確かにそうだ」と確認できるようにすることは、生徒を本気に学習に取り組みせるのにも
役立つ。

生徒の反応について述べると、Aでは、生徒と校長先生という「立場」、保護者と校長
先生との関係の「親疎」を理由に挙げ、尊敬語と謙譲語を用いた。④では、「祖父・祖母」
と言い換えた生徒は多かったが、その理由を「内外」と指摘できた生徒はごく少数であっ
た。Bでは、「公私」という場面意識によって、友達という結びつきより、客と店員とい
う「立場」が優先されるように、複数の要素が重なり合って敬語が発生していることに生
徒は気づいた。

実際にシミュレーションさせてみてわかったのだが、Aでは校長先生とほぼ同じレベル
の敬語を使うことのできる生徒が大部分、Bのように普段よく体験している形式的なもの
では、誤った敬語はほとんど見られない。

生徒は、敬語の法則性についてぼんやりとわかっている、尊敬語も謙譲語も何となくで
はあるが使えている。このことから考えると、学習する内容と日常生活における体験とを
うまく結びつけることができれば、より確かな「ことばの力」が育ち、いざというときに、
より自信をもって敬語を使える生徒になるのではないかと感じた。

(3) 「わたしのことばが変わるとき」「わたしがことばを変えるとき」

－身近な敬語表現

(1)と(2)の学習を通して、生徒は「相手意識」と「場面意識」によって敬語が発
生すること、丁寧語だけではなく、尊敬語と謙譲語も使えた方がより自然に表現できるこ
とに気づいた。

次は、生徒自身がシチュエーションを考え、敬語が発生する要素をできるだけ多く見
出す段階である。身近な例を挙げさせ、どんな「相手意識」「場面意識」によって敬語が
発生しているのか分析させる。今までの体験を振り返らせると同時に、どのような相手や
場面に遭遇したときに敬語を使えばよいのか、お互いの発表を聞き合うことで、この先の
言語生活に見通しをもたせることをねらいとする。

学習課題は「わたしのことばが変わるとき」「わたしがことばを変えるとき」とし、あ
くまでも実生活に即して考えさせた。

○生徒の反応

わたしのことばが変わるとき or わたしがことばを変えるとき (その理由)

・目上の人や年上の人と話すとき (目上の人に対してタメ口は失礼だから)

→ 同期同士のうち解けた言葉遣い

(敬意があるから)

(相手に不愉快な気持ちをさせないため)

- ・先輩と話すときと後輩と話すとき(年下の人にタメ口で話されると遺憾に思うから)
- ・先生と会ったとき(友達と話すことばでは失礼だから)
- ・知り合いの近所の人と話すとき(目上の人と話すから)
- ・毎日会っていた友達が偉い人になったとき(立場が変わったから)
- ・初対面の人と話すとき
 - (親しくないから)
 - (敬語を使わないと相手がイヤだと思ってしまうかもしれないから)
 - (礼儀,いきなりタメ口だと相手がビックリするから)
 - (自分が恥ずかしくないようにするため)
 - (相手に好印象を与えるため)
 - (初めて会う人に対してタメ口ではいけないし,知っている相手に対して敬語は言えないから)
- ・相手が敬語を使って話してきたとき
- ・お店で欲しい物がどこにあるか聞くとき
 - (自分が店員に尋ねているのだから丁寧に聞くべき。丁寧に聞いておいたほうが優しく教えてくれる)
- ・電器屋で値下げしてもらおうとき(相手によい印象を与えるため)
- ・真剣な話をするとき(話題)
- ・自己紹介をするとき(ほとんど全員が見知らぬ人だから)
- ・親に叱られているとき(その場の雰囲気)
- ・学活などで友達の名前を呼んだり意見を話したりするとき
 - (先生がいたりして普段通りに話せないから)
- ・公共の場で話すとき(相手の人数が多いから)
- ・ステージにあがるとき(公共の場だから)
- ・放送で全校に連絡するとき(公共の場だから)
- ・友達同士で話すときと,多くの人の中で話すとき(いろいろな人がそれを聞くから)
- ・授業で発表するとき
- ・職員室に入るとき
- ・家にいるときと学校などの外にいるとき(家の中では私的な造語で通じるから)
 - (学校には目上である先生がいるから)
- ・剣道を先生から教えてもらおうとき(年上と年下の関係だから。すごく上手だから)
- ・電話をかけるときとうけるとき
 - (誰からかかってくるかわからないから)
 - (知っている人か知らない人かで敬語を使うか決定する)
 - (最初に親兄弟が出る可能性が高いし,礼儀正しいと思われた方が後々楽だから)
 - (相手が目上の人かもしれないから)
- ・携帯に電話するときと家電に電話するとき
 - (誰が出るかわからないからまずは敬語で話す)
- ・仕事など社会的な活動をするとき(敬語を使わないのはあまりに不条理であるから)
- ・入試の面接のとき(合格したいから)

それぞれについて,なぜ言葉を変えるのか理由を確認しながら発表を進め,敬語発生の

新しい要素が出てきたら板書するようにした。

多く挙げられたのは、「年下の人にタメ口で話されると遺憾に思うから」「敬語を使わないと相手がイヤだと思うかも知れないから」など、「相手に不愉快な思いをさせないため」に集約される意見である。確かに他者への配慮は感じるが、「敬意」とみなすには消極的なように思える。また、「丁寧に聞いた方が優しく教えてもらえる」「値下げしてもらうため」「礼儀正しいと思われたいから」「入試で合格したいから」など、相手に不愉快な思いをさせないことが、自分の目的を果たすことや、自分に利益をもたらすことにつながっているものは、「目的」という要素にまとめた。「相手に礼を尽くそう」という純粹な他者への配慮ではなく、言葉遣いによって自分が相手からどう見られるかということも、敬語を使うかどうかの判断基準になっていることがうかがえる。

「礼儀だから」と答えた生徒は、「その状況でなぜ敬語を使うのが礼儀なのか」ということに考えが及んでいなかったもので、相手意識と場面意識によって分析し直させた。

予想通り、「尊敬の思い」から生ずる敬語は少なかった。前述したように、敬意を表する相手や対象を持たないことが影響しているのだろう。逆に考えると、そういった相手にめぐり会うことができれば、「(剣道が)上手だから」と師匠に敬語を使う生徒のように、敬意を表すために敬語を用いる者が増えるのではないだろうか。

以下は、出された敬語発生の要素を生徒と一緒に「相手」と「場面」で分類し、黒板に掲示したものである。

○敬語発生の要素を整理した板書

相手意識		場面意識
上下	内外	公私
親疎	立場	話題
人数		目的
敬意		ルール
特定・不特定		

用意していた「相手意識」と「場面意識」とできれいに分類するのは難しかった。例えば、「内外」「立場」は相手によっても場面によっても左右される要素だからである。が、このように複数の要素が複雑にからみあって敬語が発生していること、私たちはそれらをほぼ一瞬のうちに判断し適切な言葉遣いを選べるようになる必要があることを、実感させることはできたと思う。

5 考察

(1) 成果

生徒の実生活から題材を拾い上げ、日常生活における体験と知識とを結びつける活動を繰り返したことは、従来の指導と比べて敬語を使うことに対して現実味があり、必要性を感じさせるのに有効であった。机上の学問で終わらず、これから習得していかなければならない「ことばの力」であるという必然性が高まる。

また、敬語を支えている「相手意識」と「場面意識」を教材化したことにより、ことばに対する興味や意識が高まったと感じる。日常の言葉遣いについて質問を受けることが増え、より適切な表現を求めようとする生徒の様子がうかがえる。新たな視点から言葉を見つめ直すことにより、指導要領にある「日常の言語生活を学習者自ら振り返り、言葉の法則性に気付いて自らの言語事項を高めるようにすることが重要である。すなわち、自ら知識を発見していくことが大切なのである」(第2章・第2節・4)という内容にかなった

